

荒木山通信

2020年12月

第10号

荒木山の古墳
を顕彰する会

西の明日香村ものがたり

荒木山通信を愛読いただき有難うございます。

今回から、「北房の古代が熱い」にかえて西の明日香村（北房地域）の様々なことを呟いてみたいと思います。今回は「道しるべ」について書いてみます。

さて、昭和四十七年はこの里が四五〇mmに迫る集中豪雨により、死者一名、重軽傷者七名という未曾有の自然災害に見舞われました。町では災害救助法の適用を受け、翌年から河川改修工事に着手し、昭和五十一年一連の工事を完成させています。

この河川改修工事で、行方不明になっていた「道しるべ」が四十年ぶりに復元されました。その顛末は次のとおりです。

平成二十六年末、有志による飲み会で、備中川のホタルのことなど懐かしい話で盛り上がったとき、「あの石の道標はどうしたんだろう。」と言うと、「あれは、境の神谷さんの庭の傍らに在ったで。」との声が返ってきました。私たちは早速神谷家を訪れ、道しるべの復元について話すと「そうしてもらえれば、お爺ちゃんも喜ばれるでしょう。」と快諾をいただきました。お爺ちゃんと呼ばれた方は、故神谷嘉樹氏で小学校校長、水田村長を歴任され、鏡水の号で俳句を詠み、植物について精通されていた人物で、道しるべの散逸を懸念して保管していたものでした。

私たちは、早速備中川の左岸、境橋の袂に設置し

ました。

石柱は高さが六〇cm、一辺が一五cmで四面に二行書きで行き先が刻んであります。

南面に「志んまち・まつやま」東面に「おちあい・つやま」北面に「かつやま・だいせん」西面に「あざい・〇〇〇〇」で、西面のあざいの先の地名が読めません。どなたか読んで下されば感謝です。



なお、車を勝山方面へ進めると美川橋から入ってくる道と交わり、そこに道しるべがあり「右ハ備中志んまち・左ハかつ・つやま」とあり、裏面に「宝暦十一年己十月日」とあるから約二六〇年前に建てられています。

道しるべは今は少なくなっていますが、その気で探せばそれなりに見つかるこ

とができ、当時の道筋がわかって楽しいものです。



※宝暦十一年…一七六一年

【入会のすめ】

「荒木山古墳を顕彰する会」は、県下でも有数の古墳の多い北房地域で最古（真庭市でも）の古墳、荒木山東塚・西塚を顕彰し、学術調査を関係機関へ要望し、その実現を図ることを目的として平成二八年二月に発足しました。そして、古墳の整備や研修・広報活動等に取り組んできました。

趣旨に賛同し、入会を希望される方は、本会役員にお申し出下さい。（入会時に年会費三千円を納入下さい。）

会員へは、会主催の研修会や市の開催する歴史関係の講演会などご案内します。

令和三年度 新たな挑戦を！

コロナウイルスの感染で新たな生活スタイルが求められるなど、息苦しい中ですが、お元気で過ごすごしのことと存じます。

当会の活動につきまして、何時もご理解ご支援をいただき有難うございます。さて、古墳時代前期に築かれた荒木山の二基の古墳については、昨年度西塚の調査をもって終了し、今後は春に柴掻きなど清掃作業を行い貴重な古墳の保存に努めます。なお、西塚の発掘調査については、真庭市教育委員会へ向けての準備を進めていただいています。

また、当会では令和三年度から「西の明日香村・道しるべ整備事業」を実施することとしています。中身は「散策マップ」の作成と、現地へ「道しるべ」を建てます。殊に、道しるべ（看板）の設置につきましては、関係の方々にはご理解とご協力を重ねてお願い致します。

備中川河畔の古代史考

荒木山の古墳を顕彰する会

顧問 戸村 彰孝

(一)

あの頃は十二キロの砂利道を毎日三年間自転車通学をして健脚を競った。そんな七十年前の自分を懐かしく想い出しながら、古代の備中川の辺に住んだ先人たちの歴史の再現を夢みている。

備中・美作の国境は関川が備中川に合流する湯神の崖が目印だと伝えられていた。狭い切り立つ崖下の国道を下り、美川の大柳↓鹿田の町内↓鹿田橋↓下方↓垂水へと辿る道は備中川の流れに沿っていた。

国境の設定は七世紀の壬申の乱が終結した後、持統帝の時代に確定した。私たちの北房は備中国英賀郡に属し、川の下流域は美作国真嶋郡となつて幕末まで存続した。真庭市となった現在でも備中人という意識は残っているようだ。

しかし、政治上の境界は時代によって変動しようとも人や物は自然の理に従

って動く。特に古墳時代以前の世界では、古代吉備と

う漠然としたテリトリーの中に包まれる一地域という存在だったと思われる。備中川流域にくらす幾つもの小集団は、縄文・弥生・古墳の各時代に応じて、狩猟採集・農耕・物品の交換・婚姻・交通・治安治水・防

災など全ての生存に係ることでとがらについて協力して生存したであろう。

そうした河畔の古代人たちの生活の痕跡は僅かな古墳を除いては、久しく埋もれて私たちの前に姿を見せなかった。その歴史遺産が一斉に目の前を見ることになった切っ掛けは昭和四十八年、五十年に行われた。時には雨季の泥濘の中での作業もあった。毎日の出土品の洗浄整理・報告書の作成は深夜に及ぶことも多かった。

備中川に沿って点在する遺跡の調査は、中国縦貫道

工事の工程に沿って落合側の川下から遡って順次進められていった。旦那原↓須内↓宮前(以上落合町分)↓備中平↓谷尻↓桃山(以上北房町分)である。

作成された報告書は二分冊一千頁にも及ぶ膨大な内容を含む。個々の遺跡が立地している地勢や環境を概観し、工区毎に出土品の図面を掲げてその特徴を説明している。更に、遺跡間の関連や類似性についても言及するところがある。

考古学の第一次史料としての価値も高いが備中川流域の古代史を探ろうという夢を持つ私にとっても貴重な情報源の役割を果たしてくれるだろう。

次回には若干の例示が出来るよう努めたい。



【桃山遺跡からの出土品】

(須恵器の骨蔵器や緑釉陶器・銅銭など) :

古代吉備文化財センターでの企画展から :

巨大古墳と倭の五王

北房の地には、古墳が築造された四世紀の荒木山古墳から七世紀の大谷・定古墳群まで二〇〇基余りの古墳が確認されている。北房最大の立一号墳(全長八八m)は、五世紀の築造と考

えられている。その五世紀の日本(当時は倭国)ではどのような動きがあったのだろうか。

大阪平野には五世紀を中心にも多くの古墳が築造されている。その主なものは世界遺産に認定された百舌鳥古墳群と古市古墳群である。

四世紀、大和政権は奈良盆地に勢力を拡大し、多くの古墳が築造されているが、五世紀、五王の時代になると大阪平野に移っていく。

堺市の百舌鳥古墳群には日本最大の大仙陵古墳(全長四八六m)、上石津ミサンザイ古墳(全長三〇〇m)など

その代表が大仙陵古墳(仁徳天皇陵)であり、四七万㎡、三段築造で高さ三六m、三万の埴輪が並べられたと言われている。エジプトのクフ王、秦の始皇帝陵よりも大きい。更に、この大仙陵古墳の北と南側に同方向

には日本第二位の誉田御廟山古墳(全長四二五m)、仲津山古墳などが存在している。

当時倭国の王は宋書倭国伝によると、讃・珍・武・済・興が倭の五王と記されており、次のように考えら

れている。讃(応神天皇又は仁徳天皇)、珍(履中天皇又は反正天皇)、済(允恭天皇)、興(安康天皇)、武(雄略天皇)である。大陸では北魏と宋、半島では高句麗、百濟、新羅がそれぞれ勢力

争いをしていった時代である。西暦四二一年、讃が宋に遣使を派遣したのが最初であり、四三八年には珍、四四三には済、四六二年には興、四七八年には武がそれぞれ遣使を派遣している。

皆部教諭所跡と菊池家墓所

北房にある史跡の中で、国の文化財として指定されているものに「大谷・定古墳群」がある。また、真庭市の文化財に指定されている史跡には、「荒木山東塚・西塚古墳」、「下村一号墳」、「英賀廃寺」、「佐井田城」、「赤茂瓦窯跡」そして「皆部教諭所跡」と「菊池家墓所」の計七件がある。

これらの中で、最も古い時代のものが荒木山東塚古墳であり、最も新しいものが今回紹介する皆部教諭所と菊池家墓所である。

皆部教諭所は、文政五年（一八二二年）、現在の下皆部北区に開設された。ここで村民を教えていたのが、儒学者の菊池文理（号は陶愛）である。



【皆部教諭所跡】

この教諭所で菊池秋坪が生まれた。天保八年（一八



三七年）、秋坪が十二才の時、父文理が亡くなり、皆部教諭所は閉鎖となる。秋坪は、下皆部村を離れ、緒方洪庵の「適塾」で学ぶ。

その後、福澤諭吉らとヨーロッパに派遣される。明治元年（一八六八年）に秋坪が創設した「三又学舎」



【菊池家墓所】

は、福澤諭吉の慶応義塾と並んで、洋学塾の双壁とまで言われた私塾であった。もう一つの史跡、菊池家墓所は、皆部

教諭所跡のすぐそばにある。明治一六年、秋坪の息子であり、当時、東京大学理学部長で日本人初の数学者でもある菊池大麓が、陶愛と陶愛の祖母理喜の墓を建てた。大麓は後に、東京帝国大学総長、文部大臣、京都帝国大学総長などを歴任する。

この二つの文化財にまつわる歴史的人物が北房の地を發祥としていることを誇りに思い、志を鼓舞する糧としたものである。

（平城 元）

県古代吉備文化財センターへ

一月二〇日（金）、役員研修として古代吉備文化財センターの見学に行きました。そこでは、センターの方から展示品についての詳しい説明を受けました。中国自動車道の建設に伴って昭和四八年に発掘された北房の桃山遺跡からの出土品も展示してありました。須恵器の骨蔵器や地方では珍しい高級食器の緑釉陶器、

ている。

一方で、菅田御廟山古墳（応神天皇陵）などの古市古墳群は大和盆地近くの内陸部に築造されたのである。大阪湾から大和政権に向かうための水路（大和川）、陸路の要衝であり、海外からの使者に対し二カ所の古墳群を通過させることにより、大和政権が広大であることを見せるための壮大な仕掛けであったと考えられている。

当時、倭国には鉄資源が無く、鉄を求めて朝鮮半島に度々出兵を試みている。



【尾上車山古墳にて】

墳長138.5mの前方後円墳。国史跡。

（南條保之）

六世紀になると朝鮮半島からの渡来人により砂鉄による鉄の製造が確立するのである。五王の時代は、大陸、半島を意識した時代であったのだろうか。

延喜通宝という希少な銅銭などです。装飾品と思われる水晶玉や髪をまとめるための笄、化粧に使う毛抜きなどもあり、「墓主は都で暮らした高貴な女性と推定され、故郷で安らかな眠りにつくことを願った人々の祈りが込められているようです。」との説明に古代のロマンを感じました。展示されていなかった北房ゆかりの出土品も収蔵庫で見ることができ、充実した一時でした。

センター見学の後、近くにある中山茶臼山古墳と尾上車山古墳にも行きました。古墳への道の入り口にある「尾上車山古墳 一〇〇m」の道しるべを見て山道を上りましたが全く見当たりません。引き戻して、途中の分かれ道近くの畑で作業をしている地元の人に尋ね、やっとたどり着くことができました。分かれ道にも道しるべがあったらと思う、道しるべの大切さも感じた研修でした。

（畦田正博）

北房の魅力を全国に

西の明日香村へ 道しるべを！

「全国初の五段方墳」「天皇陵級の五段構造墳」「西の明日香へ熱いまなざし」平成五年五月に山陽新聞が報じた記事で、五月二十九日の現地説明会には全国から四百人近い考古学ファンが詰め掛けたとも報じている。

この大谷一号墳の発掘調査の後、定古墳群の発掘調査が行われ、その成果を踏まえて、平成十七年十月山陽新聞が、「大和のくさび象徴」のタイトルで七世紀の北房の古墳の持つ意義について大きく報道した。発掘を指揮した岡山大学の新納泉教授(当時)は、

「定東塚古墳は天皇陵のミニチュア版で、副葬品の金糸は全国で数例しかなく、金のリングは類例がない。」また、「吉備北部の有力者は、蘇我氏が吉備中枢の伝統勢力を押さえるのを助けて地位を高めた。それを示

すのが方墳や金の装飾品でしょう。」

と語っている。

つまり、定古墳群の被葬者たちが吉備勢力を押さえ、大和政権の中央集権化に貢献したということで、古代史上大きな役割を果たしたことになる。

また、吉備の中枢では古墳が殆ど築かれなくなった飛鳥時代に、この盆地では段構造の方墳が六基連続して築かれており、畿内を除くと西日本で例がないと言われている。

さらに、荒木山東塚から約四百年間、首長墳が連続と築かれており、北房はま

さに「西の明日香村」と呼ぶにふさわしい里である。

そうしたことから、全国から多くの方に訪れていただくことを目指して「道しるべ」を建てることを始めています。

案内マップを片手に、この美しい山里をのんびり散策してもらいたいのです。そして、何より地元の私たちが近くに在る古墳や遺跡について学び、来訪者に語れるようになりたいのです。

「西の明日香村」は、ゲンジボタルやコスモス街道でも有名です。この里で暮らす我々の営みそのものが「西の明日香村」を創って行くのです。

皆さんのご理解とご支援を心よりお願い致します。
(久松秀雄)



「西の明日香へ熱いまなざし」と報じた平成5年5月30日の山陽新聞の記事

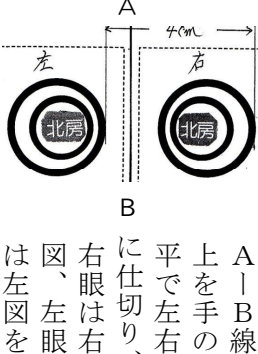
3D写真で故郷を撮ろう

一〇〇年前の技術も捨てた物ではない

私は一〇〇年前のステレオ写真技術で故郷北房等を立体(3D)写真にてフェイクブック配信しております。私は、メガネの三城で利き眼、3D視力検査をしておりました。これらは就学前に行います。

日本人の利ききは手で一割、眼で三割です。また、3D視力が弱いと言われています。漢字やカメラは手・眼共に右利き用に作られています。3D写真は、スポーツ・映画・考古学など幅広く活用されています。3Dには左右二つの写真が要ります。

円錐台に北房の字を載せた時、図の様に左右が異なります。



見ると利き眼の方に立体的

に浮く円錐台が見えます。

3D写真を撮る時、右側で撮り、次に横に4cm水平移動して左側を撮ります。そのプリントを左右間4cmにして合わせると裸眼で奥行きのある3D写真が見えます。また、一〇〇均のCan☆Do「スマホで3D VRメガネ」一〇〇円では数倍の拡大写真になります。スマホでの撮影ではアプリでその場で3D写真が作れます。ちなみに3D写真は横2m、縦8m位まで作れます。

今、北房文化センターロビーに醍醐桜・神庭の滝などの3D写真を展示しております。裸眼でも見えますがスマホに取り込めばゆっくりご覧いただけます。

今、世界は3Dに音、匂い、振動、触感を加えた6D、大容量高速通信6Gの時代です。「北房デジタル4DVR館」を設立し、北房の文化・自然遺産をドローン活用で5D、5Gを発信したいです。それによって、VR技術でスマホで実物大の立体映像・動画を視聴してもらえます。

(山本 昇)